



19

世界文学全集

アンナ・カレーニナ〈2〉

トルストイ／原久一郎訳

世界文学全集 19

アンナ・カレーニナ II

レフ・トルストイ

訳者 原久一郎

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／大日本印刷株式会社 製本所／大日本製本

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／日本紙パルプ商事株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 1971

目次

第 四 編 (統		5
第 五 編		37
第 六 編		207
第 七 編		391
第 八 編		548

Анна Каренина

Лев Николаевич Толстой

アンナ・カレーニナ

(Ⅱ)

復讐^{ふしゅう}はわれにあり、
われ酬^{なぐさ}いなん

第四編（続）

18

カレーニンとの話がすんだあとで、ウロンスキイは入り口の階段へ出た。そして、自分がいまどこにいるのか、これから徒歩もしくは馬車で、どこへ行ったらいいのか、しきりにそれを思い出そうと努めながら、そこにしばらく立ち止まっていた。思うさま恥ずかしめられ、虐げられながら、その屈辱をそそぐ力をさえ奪われた、罪深い人間のような気持ちでした。いままであんなにも誇らしく、軽やかに歩いてきた道から、たたき出されたような気持ちでした。あれほどしつかりしたものと思われていた自分の生活の、ありとあらゆる慣習や規律が、不意に少しも適用できない偽物であることがわかったのだ。いままでは自分の幸福に対する一時的な、多少こっけいな邪魔物にすぎない、哀れな人間だと考えられていた欺かれた夫が、突

如彼女自身によって呼び戻され、こちらの屈従を思い知らせるような高みにまで引き上げられた。そしてその高みに引き上げられた夫その人は、もういままでのような腹黒い、偽善的な、こっけいな人間ではなく、まことに善良な、素朴な、偉い人物であった。ウロンスキイはそれを感じずにはいられなかった。役割りには急に変わった。ウロンスキイは彼の崇高と自己の卑賤、彼の公正と自己の不正を、わが身にひしひしと痛感した。あの男は悲哀のどん底にあっても、寛容ということを忘れなかった。だのにこのおれは、こうしたいつわりの心境の中に、低劣で弱小な形骸をさらしている——と彼は痛感した。が、いままで不当な侮辱を加えていたその人物よりも、自分のほうがはるかに低劣であったというこの認識は、彼の悲哀の一小部分を形作ったにすぎなかった。彼がいま自分を言いようのない不幸な人間だと痛感したのは、そのときまで冷却していた彼女に対する情熱が、永遠に彼女を失ったと知ったこのときになって、今までよりもはるかにはげしく、燃え立って来たように思われたからである。彼女の病中、彼は彼女を底の底まで知るようになった。彼女の魂を知りつくした。と、彼には自分がそのとき

まで、ちっとも彼女を愛していなかったように思われて来た。しかも、ようやく彼女というものがわかって来て、正しい意味で愛するようになると同時に、自分は彼女の面前ではげしい屈辱をうけ、彼女の心に恥ずかしい記憶ばかりとどめて、永遠に彼女を失ってしまったのである。なかでもなによりおそろしく思われたのは、カレーニンが恥じ入っている自分の顔から手をむしり取ったときの、あのこっけいな恥ずかしい自分の立場であった。ウロونسキイは茫然自失した人のように、カレーニン家の入り口の階段につっ立っていた。なに一つなすべきことを知らなかった。

「辻馬車つじばしやを呼んで参りましょうか！」と門番がたずねた。

「ああ、辻馬車つじばしやを」

三日三晩まんじりとしなかったあとで、家へ帰って来ると、ウロونسキイは服も脱がずに、ごろりとソファの上へ横になって、両手を組んで、その上に頭を載せた。頭が重かった。想像や回想やきわめてへんてこな考えが、猛烈な早さで、ひどく鮮明に、あとからあとから浮かび上がって来た。自分が病人に注いでやるときにさじからこぼした薬、産婆の白い手、寝台

の前の床ふどの上にひざまずいていたカレーニンの奇妙な姿勢、などに関するそれであった。

「眠ることだ！ 眠って忘れちまうことだ！」すっかり疲れているから眠ろうと思えばすぐにも眠れるに違いないという、健康な人の落ち着き払った自信をいだきながら、われとわが心に言った。そしてじっさい、またたく間に、頭脳がもやもやして来て、忘却の淵ふしにおちいり始めた。『無意識境』の海の波浪が、頭の上でぶつかり始めた。突然、猛烈な電気の放電のようなものが、ドカンと心を打った。彼はスプリングのよくきいたソファの上で、全身がおどりと出すほどはげしく身震いし、両手をつっ張り、びっくりしてはね起きた。そして膝立ちひざだちになった。両眼は、ちっとも眠らなかつたように、大きく見開かれた。いまのいままでもやもやと感じていた手足のけだるさや頭の重さは、一時に消えうせてしまった。

「あなたはわしを泥の中へ踏み倒してもよろしい」というカレーニンの言葉が聞こえた。そして彼は自分の前にカレーニンの姿と、そのカレーニンには目をくれず、優しさと愛とのこもった目で自分のほうをじっと見ている、火のように熱く頬ほのほてった、目の輝いて

いる、アンナの顔を見た。さらにまたカレーニンが自分の顔から手を引き放させたときの、あの愚かしいこっけいな自分の姿を見た。彼はふたたび足を伸ばして、どかりとソファの上へ元の姿勢に身を投げて、目を閉じた。

「眠ることだ！ 眠ることだ！」彼は心で言った。が、両眼を閉じていながらも、あの思い出深い競馬の日の晩のように、アンナの顔がひとときわはつきりと見えて来た。

「あんなことはない、またこれからもないだろう。あの女はそれを記憶の中から消し去ってしまいたいと思っているのだ。しかし、おれはこれなしに生きていくことができない。どうしたらいままでどおりになれるだろう？ どうしたらいままでどおり和解することができるだろう？」

彼は声に出して、無意識に二度くり返した。こうした言葉のくり返しは、彼が自分の脳裡にむらがついていると思った新しい心象と回想との、わき出ようとするのをおさえつけた。がそれは彼の連想を長くおさえつけてはおかなかった。やがてまたあとからあとから、非常な早さで、幸福だったときのことが——それとい

っしょに、いましがたの屈辱的な光景までが——走馬灯のように現われてきた。「あの、手を放してくださいな」とアンナの声が言った。彼は手を放した。とたんに彼は、自分の顔が恥辱にまみれた愚かしい表情を浮かべているのを、はつきりと感じた。

すこしも望みがないとわかっていたくせに、なんとかして眠ろうと努めながら、彼はじっと寝床の中に横たわっていた。そしていろんな思想のつながりから偶然にわいて出る言葉を、絶えず小声でくり返しなから、それによって新しい心象がうかび出るのをおさえつけようと努めていた。彼は聞き耳を立てた。——と、異様な狂人のそのようなささやきで、こうくり返している言葉が聞こえた。「真価を認めることができなかった。十分にうけ入れることができなかった。真価を認めることができなかった。十分にうけ入れることができなかった」

「どうしたんだ？ ひょっとしたら、おれは間違っているんじゃないかな？」彼は心で言った。《そうかも知れない、いったいどうして人は氣違ひになどなるんだろう？ どうして自殺などするんだろう？》と彼はさらに言って、目を見開いた。彼は自分の頭のそば

に、^{あによろ}嫂の

ワリーヤがこしらえてくれた刺繡^{ししゅう}のついた枕^{まくら}を見いだし、おどろきに胸を打たれた。彼は枕のふさにさわりながら、ワリーヤのこと、最後に会ったときのことを、思い出そうと試みた。が、局外の事柄を考えるのが、ひどく苦痛であった。《いやいや、眠らなけりゃいけない！》彼は枕を引き寄せて、頭をのせた。しかし、目を閉じておくためには、かなりの努力が必要であった。彼はふたたびはね起きて、寝台の上に坐^{すわ}りなおった。《おれにとっては、これはもうすんでしまったことなのだ》彼は心で言った。《おれはこれからなすべきことを熟考しなければいけない。なにが残っているだろう？》

すると彼の考えは、速やかに、アンナに対する愛以外の生活の方へ流れ移った。

《名誉心？ セルブホフスコイ？ 社交界？ 宮廷？》そのいずれにもとどまることができなかった。

これらはすべて前には意義を持っていたのだが、いまではもうなんらの意義ももたないのだった。彼はソファの上に立ち上がって、上着を脱ぎ、バンドをはずした。そして楽に呼吸ができるように、毛深い胸をはだけた上で、それから室内散歩をやり出した。

《こんなときに人は氣違^{きちが}いになるのだな》と、彼はくり返した。《こんなとき人は自殺をするのだな……恥ずかしい目にあわないうように》彼はゆっくりと言いつた。

彼は戸口へ行ってこれをしめた。それからじっと目を見すえ、かたく歯を食いしばりながら、机のそばへもどって、ピストルを取り出し、一応改めてから、弾丸^{だんがん}をこめ、またじっと考え込んだ。二分間ばかり、ぬきさしならず、思考の張りつめている表情を浮かべながら、頭をたれ、ピストルを手にしたまま、じっとそこに立つて考えつづけた。《もちろんだ》彼は、道理にかなった、筋道のある、はっきりした思索の糸が、自分を疑う余地のない結論に導いた、といった語調で、われとわが心につぶやいた。が彼にはたしかに思われたこの『もちろん』も、その実、今までのあいだに十回も通って来た回想や想像の同じ範囲を、もう一度歩みなおした結果にすぎないのだった。永遠に失われた幸福の思い出、現在の生活のまったく無意味であるという考え、自分の受けた屈辱の意識。——そういうものの結果にはかならなかった。

それはまたそうした想像や感情の当然の帰結でもあ

った。

《もちろんだ》自分の考えが三度回想や思索の妖術に惑わされた圈内へ戻って来たとき、彼はくり返した。そして胸の左側にピストルを押し当て、てのひらで握りつぶしてしまうような意気込みで、腕いっぱい力で、ぐっと握りしめながら引き金を引いた。発射の音は聞こえなかった。が胸部に当たったはげしい打撃が、彼をよろめかせた。彼は机の端につかまろうと思つた。しかし思わずピストルを落として、よろよろとなつて、そのままドシンとしりもちをつき、びっくりしたように、きよろきよろと周囲を見回した。ガニ股に湾曲した机の足や、紙くずかごや、虎の皮の敷物などを、下のほうからながめながら、これが自分の部屋だといふことには気がつかなかった。客間を歩いている従僕のギシギシきする小きぎみの足音が、はっと正気にかえらせた。一生懸命に考えをまとめた。そして彼は、自分が床の上にいることをさとした。虎の皮の敷物と自分の手に、べっとりといっている血糊を見だし、自分がピストル自殺をくわだてたことを彼はさとした。

《なんてばかばかしい！ 急所へあたらなかったん

だ！》

と、めくら滅法に片手でピストルをさがしながら、彼は言った。ピストルはすぐそばにあったのだが、彼は遠くのほうばかりさがした。ピストルをさがし続けながら、今度は反対の側へ身を伸ばした。と彼は、からだの釣り合いを保つことができず、だぐだぐと血を流しながら、そのままそこに倒れてしまった。

気が弱くて困るということを口癖のようにいつも知人にこぼしていた頼ひげのあるハイカラな従僕は、床の上にぶっ倒れている主人を発見すると、飛び上がるほどびっくりし、出血している主人を置きざりにして、助けを求めに飛び出した。一時間たつと、嫂のワリーヤが駆けつけて、四方八方へ医者呼びにやり、どやどやと一時にやって来た三人の医師の手を借りて、負傷者を寢床へ寝かせつけた。そして彼女は、義弟の看護をするために居残った。

19

カレーニンのおかした誤算は、妻の悔悟が真剣なので、自分が彼女を許してやり、彼女が死なずにすむよ

うな場合が、あるかも知れないということを、妻と会うに当たってあらかじめ考えておかなかった点にあったのだが、モスクワから帰って二カ月たつと、この誤算が、疑う余地のない、はっきりしたものになった。

が、彼のやってのけたその誤算は、彼がそういう場合をあらかじめ考えなかったためにのみ起こったのではなく、同時にまた、彼が瀕死の妻と顔をあわせるその日まで、自分の心を知らなかったために起こったのである。彼は病気の妻の枕もとで、生まれて始めて、他人の悩みが自分の心にかもし出した、相手の悩みをくんでやるという感傷的な気持ち、——今までの彼が有害無益な弱点として恥じていたその気持ちに、打ち負かされてしまったのである。と、彼女に対する憐憫、彼女の死を願っていたことを悔いる気持ち、特に、他人を許してやるという歓喜の情が、突如彼に、自分の苦悩が終わったという事実だけではなく、これまで一度も味わったことのない、心の平安をさえ感じさせた。そして突然、今まで自分の苦悩の源泉だったものが内的歓喜の源泉になったことや、彼女を非難したり叱責したり憎んだりしていた時分には解決しがたいように思われていたものが、彼女を許し彼女を愛するよ

うになると同時に、きわめて単純な明白なものになったことを、しみじみと感ずるのであった。

カレーニンは妻を許し、その苦悶と悔悟に対して、心から妻をあわれんだ。ウロンスキイをも許した。絶望のあまり行なったという自殺行為のうわさを耳にしてからは、とりわけ彼を気の毒に思った。カレーニンはまた子供に対しても、以前より同情を持つようになった。そして、あまりにこれまでめんどろを見なかったという点で、自分を責めるようになった。が、新たに生まれた小さい女の子に対しては、単なる憐憫にとどまらず、甘い優しささえまじり合った、一種特別な気持ちを経験した。最初彼は新たに生まれた脆弱なその女兒——母の病中まったく投げやりにされてあった自分の子でないその女兒、彼がめんどろを見なかったらきっと死んでしまったに違いないその女兒に対して、単なる同情の気持ちから世話をやいた。そして自分がどんなにその子を好きになったか気づかなかった。彼は日に数回ずつ子供部屋へはいつて行って、長いことそこに坐っていた。そのために、最初はびくびくしていた保母や乳母^{ばいばい}までが、すっかり彼になれてしまった。彼はときどき、黙々として半時間も、眠っている

赤ん坊のサフランのように真つ赤な、むく毛の多い、しわだらけの顔をながめたり、しかめた顔の動くさまや、手の甲でしきりに目や鼻をこすっている、指をすっかり畳み込んだ、むっちりとふくれた手の様子に、見とれたりしていることがあった。そんなとき、特にカレニンは、全く平安な満足しきった人間になったような気持ちが出て、自己の境遇になんら異常なもの、変更する必要があるものを認めなかった。

が、だんだんときがたつにしたがつて、この境遇がどんなに自分にとって自然であっても、そこにとどまっているわけにゆかないということが、次第にはっきりとわかって来た。自分の魂を導いていた幸福な霊的な力のほかに、自分の生活を導いているもう一つ別な、荒しい、前のと同程度、もしくはそれ以上に力強い力のあること、そしてこの力が、彼の望んでいる謙虚な安らぎを与えないということが、すべて、だんだんわかって来た。みんなの者がどうしたのだといったような驚きの色を浮かべて、自分の様子をながめていること、自分の気持ち理解できずにことあれかしと待ち構えていることが、彼にはだんだんわかって来た。特に彼はアンナとの関係において、堅牢でない不自然な

もののあるのを感じた。

死の切迫によってかもし出された柔軟な気持ちが消えてしまうと、カレニンは、アンナが自分をおそれ、煙たがり、ともにこちらの目を見ることができずにいるのに、気がつくようになって来た。彼女はなにか話したいがどうしても話す気持ちになれないというような態度をしていた。彼女は自分たちふたりの関係がこのままで進行したいのを予感し、彼にたいしてなにものかを期待しているようであった。

二月下旬に、今度生まれたアンナの子供、同じくアンナと命名されたその女兒が、病氣にかかるという出来事が起こった。カレニンはその朝子供部屋へ出かけて行き、医者呼びにやる手配をして、それから役所へと馬車を駆った。役所の仕事をすませると、彼は三時すぎに家へ帰って来た。玄関へはいるとき、彼は金モール、熊の毛皮の肩衣かたぎという、お仕合せ姿の好男子の従僕が、ラシャメン犬の毛皮から作った真つ白いロトーンダ（家注 婦人用の長そでなし外套）を持って、直立しているのに目を止めた。

「どなたが来ておられるのだ？」とカレニンはたずねた。

「エリザヴェータ・フョードロヴナ・トヴェルスカヤ公爵夫人がお見えになつていらつしゃいます」微笑を浮かべながら（とカレーニンには思われた）従僕は答えた。

カレーニンは、つらい苦しいこれまでの期間に、社交界での自分の知人、そのうちでも婦人たちが、自分と妻との関係に特殊の興味をいだいていることを認めていた。彼はそうした知人たちの目の中に、かろうじて押し隠している喜悦の情、いつぞや例の弁護士の中に認め、今またこの従僕の目に認めたような、なものかに対する喜悦の情を、認めないわけにはいかなかった。だれも彼も、歓喜に酔っているようだった。まるでこう、だれかを嫁にでもやる時のようであつた。人々は彼に会うと、隠しきれない喜びの色を浮かべて、その健康をたずねるのだった。

トヴェルスカヤ公爵夫人が来ているという事實は、彼女と結びついていっている思い出からいっても、あまり自分が彼女を好かないという点からいっても、カレーニンには不愉快であつた。で彼はそのまま子供部屋へはいって行つた。第一の子供部屋では、セリョージヤが、ぴつたりと机に胸を押しつけて、両足を椅子の

上に乗せ、愉快そうにしゃべりながら、一生懸命になにやら絵を描いていた。アンナの病中に、フランス婦人と代わつたイギリス婦人の家庭教師は、編みかけのショールを手にして子供のそばにかけていたが、あわてて立ち上がると、ていねいにお辞儀をして、ぐいぐいとセリョージヤを引っ張つた。

カレーニンは片手で子供の髪をなでながら、妻の健康に対する教師の質問に答えたり、医者が赤ん坊の容態をなんと言つたか、それをたずねてみたりした。

「お医者さまの話では、別に危険なことはないそうでございます。それであのう、お湯を使わせるように、とのことでございました。はあ」

「しかし、まだあの通り苦しいがっているじゃありませんか」と、隣室の赤ん坊の泣き声に耳を澄ませながら、カレーニンは言つた。

「どうもあの乳母が、だめなんだらうと、思いますんでございますけどね、旦那さま」思ひきつたという語調でイギリス婦人は言つた。

「どうしてそうお考えになるんです、あなたは？」と歩みを止めて彼はたずねた。

「ポール伯爵夫人のお宅でも、これと同じようなこと

がごきますのよ、旦那さま。しきりにお子さんに医療をなすっていらっしゃいましたけど、だんだんにしらべて見ましたら、そのお子さんはお腹が空いているだけだったということが、ようやくわかったんでございます。乳母にお乳がなかったんでございますのはあ」

カレーニンは思案に暮れた。しばらくそこに立ちつくしてから、彼は隣室へはいって行った。赤ん坊は乳母の手に抱かれたまま、首をのけぞらせて、しきりに身をもがいていた。そして口の先へ突きつけられたふつくりとふくれた乳母の乳房を、含もうともしなければ、乳母と、自分の上へ身を折り曲げるようにした乳母とが、ふたりがかりで『ねんねんよう』と、あやしてくるにもかかわらず、黙ろうともせず泣き叫んだ。

「まだちつともよくならないかい？」とカレーニンはたずねた。

「ひどくおむずかりになるんでございますのよ」さきやくような声で保母が答えた。

「ミス・エドワードの話では、乳母に乳がないのかも知れないというのだがね」と彼は言った。

「わたくしもそう思っているんでございますのよ、旦那さま」

「ではなぜそのことを言ってくれないのか？」

「どなたに申し上げられましょう？ 奥さまはあの通りまだおからだがお悪いんでございますもの」と保母は不服らしい調子で答えた。

この保母は古くから邸に使っている召使이었다。カレーニンはこういう単純な彼女の言葉の中に、自分の立場に対する当てつけのあることを認めた。

赤ん坊は身悶えしながら、同時にしわがれた声を張り上げて、前よりもいっそうはげしく泣き叫んだ。保母は手を振って、赤ちゃんのそばへ行き、乳母の手から抱き取って、しきりにそこらをあやして歩いた。

「医者を呼んで乳母をみてもらわにゃならんね」とカレーニンは言った。

見たところすこぶる丈夫そうなおめかし、やの乳母は、お払い箱になりそうな形勢にびっくりして鼻声でなにやらムニャムニャ言った。そして彼女は、大きな胸を隠しながら、自分の乳の出具合を疑ったことに對して、せせら笑うような笑いを浮かべた。この笑いの中に、カレーニンは、自分の立場に対するあざけり

の色を発見した。

「ほんとにお気の毒なお子さまですこと！」赤ん坊をあやしながらかう言って、保母はなおも歩き続けた。

カレーニンは椅子に腰をおろし、切なそうな悲しそうな顔つきで、室内を行ったり来たりしている保母の姿をながめていた。

ようやく泣きやんだ赤ん坊をやんわりとくぼんだ小さな寝床へ寝かしつけ、枕をなおして、保母がそばを離れると、カレーニンは立ち上がり、苦勞して爪先立ちで歩きながら、赤ん坊のそばへ寄って行った。ややしばらく、彼は無言で、同じ悲しそうな顔つきを続けながら、じっとその姿をながめていた。突如、にこやかな微笑が、髪や額の皮を動かしながら、ぱっとカレーニンの顔に浮かび上がった。彼は同じ静かな歩調で、そっと部屋を出て行った。

食堂へはいるとベルを鳴らして、はいって来た従僕に、もう一度医者呼びにやれと命じた。あんなに可愛らしい赤ん坊のめんどろを少しも見てやらないことに対して、彼は妻がいまいました。で、そういういまいまいましい気持ちの結果、彼女のそばへ行きたくなかった。ベットシイ夫人にも会いたくなかった。が、

なぜいつものように自分のそばへ来ないのだろうと、妻が不思議に思うかも知れないので、彼は自分に努力を加えて、寝室のほうへと近づいて行った。柔らかな敷物の上を戸口のほうへ進んだとき、聞きたくない話が、心ならずも耳にはいった。

「あの人がはなれて行ってしまうのでさえないければ、あなたのお断わりになるのも、あの人のこと、わたしにはよくわかるんですけどね。でも、こちらのご主人はそんなことには超然としていらっしゃるはずだと思えますがねえ」とベットシイが言った。

「あたしは主人のためにでなく、あたし自身のために、そんなこと望みませんの。もうもう、そんなことおっしゃらずにおいでくださいませ！」アンナの興奮した声が答えた。

「ええ、でもね、あなたはあの人と、別れのあいさつをしたと思うずには、いられないだろうと思いますのよ。なんといいてもあなたのために、自殺までしかけた人ですからねえ……」

「それですから、なおさらあたしいやなんですのよ」カレーニンはびくりしたような、悪いことをしたといったような、表情を浮かべて立ちどまった。その